日本航空機内誌

Agora

アゴラ　ビジネス・エグゼクティブのための知的情報誌

JAL

September 2000 9

ご自由にお持ち帰りください

われら地球人

馬場崎研二

インド・ダラムサラで典麗の仏画を描き続ける日本人タンカ絵師

アゴラ・スペシャル

ヨーロッパ王室の故郷ドイツ・コーブルクと「中世」が残る世界遺産の街バンベルク

馬場崎研二

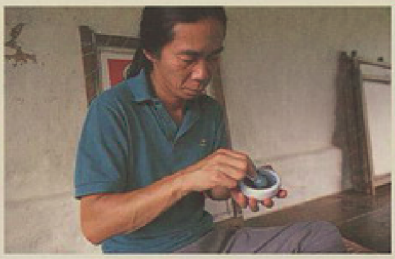
インド・ダラムサラで典麗の仏画を描き続ける日本人タンカ絵師

撮影 長岡洋幸
文 長田幸康

「タンカ」は掛け軸様の装丁をした布地の仏画。
インドに生まれたパタと称される布画を起源とし、
チベットやネパールの人々に広く浸透した仏教芸術である。
仏教経典の所説を忠実に反映する一方、その画風は緻密にして鮮烈、
宗教的な意味もさることながら、その芸術性の高さで知られている。
学生時代に訪れたネパールでそんなタンカに魅せられ、
ヒマラヤを望む町・インドのダラムサラでタンカ絵師となった
日本人男性がいる。その二〇余年の軌跡、そして現在を追った。

われら地球人

アトリエでお弟子さんの絵に修整の筆を入れる。厳しい仏教経典の規定に沿っているか、緻密なタンカを細部までチェックする。この時は、無数に描かれた指の爪が一部なかった。馬場崎さんの筆先を食い入るように見つめる現在のお弟子さんは、週に一度訪れる。



(左)現在制作中のタンカ、「ドルジェ・ナムジョム・マ」は、厄除け・魔除けの意味を持つ尊像。仕上げには純金の金泥が塗られる。

(上)地となる色を太めの筆で塗る。後から細かい仕上げができるように、岩絵具を塗っては削る作業を繰り返し、表面を平らに保つ。

日本人絵師が描く、チベットの仏

ヒマラヤを間近に望む、インド北部ヒマチャル・プラデシュ州。カングラ渓谷の斜面のバス道路沿いに細長く広がる町ダラムサラの中心部から、バスはさらに山道を登る。

終点はマクロード・ガンジ。バザールを行き交う人々の顔つきに、なんとなくほっとさせられる。それは日本人とほとんど変わらない、チベット人たちの姿だ。

山道を歩いて登ること二〇分。下界のバザールの喧噪はもう届かない。透明な空気と静寂に包まれた木立の中にひっそりと建つ一軒家が、仏画師・馬場崎研二さんのアトリエ兼自宅だ。

キャンバスには、細かな補助線が縦横に引かれている。その前に座って絵筆を運ぶ馬場崎さんが描くのは、釈迦牟尼、阿弥陀如来、観音菩薩——インドに生まれ、チベットに伝えられた仏教の仏、菩

(左)96年制作「カーラチャクラ図」。「カーラチャクラ」は、何日もかけて遠路から何万という人々がこの法要のために集まるという重要な教え。(写真：日貿出版社提供、荒川健一氏撮影)

(右ページ上2点)タンカの塗料は岩絵具。粒が細かいほど淡い色がでる。愛用の道具とすり鉢で希望の色の岩絵具を作る馬場崎さん。(同中央)タンカの下絵には、経典に沿った複雑な補助線を引く。その規定は持っている法具の種類から目と眉の間隔まで、細部にわたる。

薩、神々たち。

一九七四年、大学四年生の馬場崎さんの旅の出発地点はネパールのカトマンズだった。そして、土産物店の店先で「タンカ」と呼ばれるチベット式の仏画に出合う。

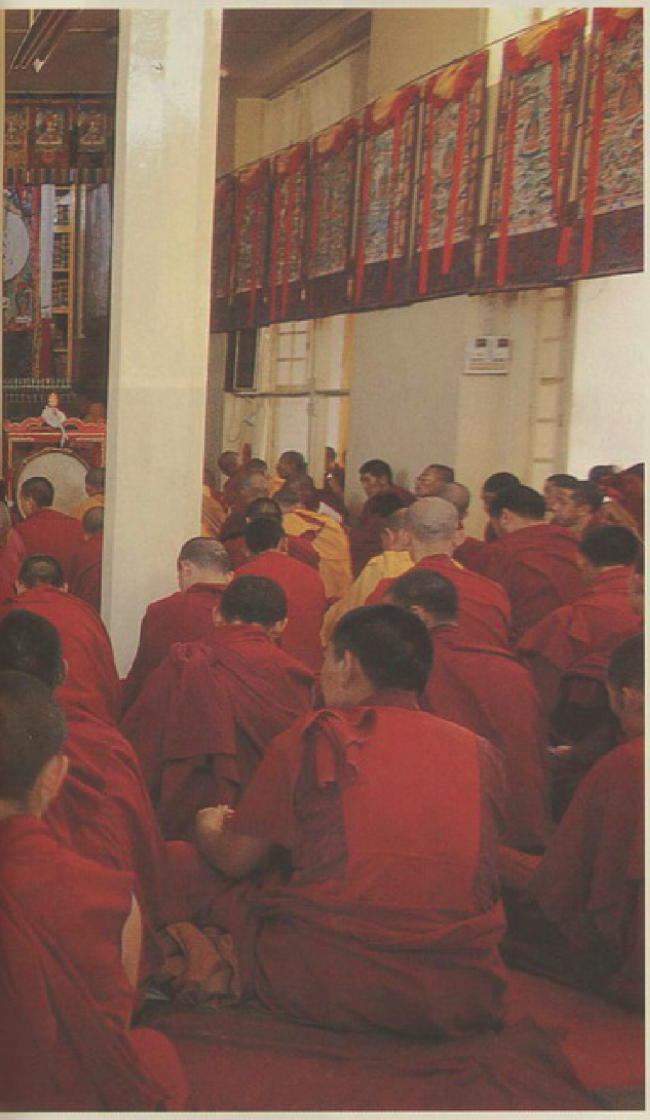
「人間が描いたものとは信じられなかった」

その緻密さは脳裏に焼きついた。しかし、わずか三年後、自身が筆をとり、二〇年以上にわたって描き続けることになろうとは夢にも思わなかったという。

「タンカ」との出合い

仏画師——こう書くと浮き世離れした芸術家か隠遁行者の風貌を思い浮かべるかもしれない。しかし、実際の馬場崎さんに会う者はおそらく、そのどちらとも遠い印象を抱くに違いない。

朝七時半、馬場崎さんは二人の子どもたちとともに床を離れる。上の子は幼稚園に、下の子は保母さんのもとに送り出す。遠距離恋愛の末結ばれたオランダ人のパートナーは、診療所に勤める女医さ



ん。夕刻、子どもたちが帰ってくるまでに夕食の支度をするのは馬場崎さんの役目だ。

タンカを描くのは、朝一〇時から午後五時頃まで。

絵筆を運んでいる間は無心。描くべきものはすべて心の中にあり、技法は二三年間の経験の末、体に染みついている。一枚のタンカを描くには二〜三ヵ月はかかる。並みはずれた集中力と根気を必要とするはずだ。

しかし、馬場崎さんにとって、タンカを描くことは苦行でも何でもない。むしろ喜びであり、日常生活そのものなのだ。

彼がタンカを描くとき、そして語るとき、その顔には穏やかな微笑みが浮かぶ。どこかで見たことがある、心の底から湧き上がるようなその笑み。それは亡命中のチベットの精神的指導者、ダライ・ラマ一四世のたたえる微笑みに重ね合わせることができるだろう。

タンカはチベットに華開いた仏教芸術である。しかし、一九五九年の「チベット動乱」により、多くの絵師たちがダライ・ラマ一四世とともに祖国を後にしてインドやネパールに居を構えることとなった。その中心地が、ダラムサラである。皮肉にも、亡命という苦境を経たことによって、タンカの芸術的価値が世界に知られるようになった。そして、実際、馬場崎さんもネパールでそのタンカに出合ったのだ。

師の笑顔に魅せられて

「別の常識というものがあるんじゃないかと思った。異質な世界を見てみたかった」——友人のだれもが当然のように就職活動に没頭するのを目にしながら、大学四年生の馬場崎さんは旅に出た。インドに魅せられた彼は卒業後、再びインドに戻り、いわゆる「ヒッピー」のメッカ、南インドのゴアの海辺で自炊生活を経験した。

何をするわけでもない、何の変化もない単調な生活が三ヵ月ほど続いた。

「やっぱり日本人なんだよね。浜辺で寝そべって、何もしない。そ

(右ページ右2点)初めてダラムサラを訪れた時からの自宅兼アトリエ。数年前に馬場崎夫妻の設計で増築した。壁はインド特有の牛糞と泥の土壁で、モンスーンの時でも湿気をよく吸うという。下はアトリエ内部。(同左)チベット人のタンカ表装師の自宅で。持参したタンカを前に、二人で布地を選ぶ。タンカの表装に使われる布はシルクが多い。

(上)チベット仏教カーギュ派の活仏カルマパ17世の住居、ギュート・ラモチェ寺にて。隣はエヴァ夫人。二人が首に巻いている赤い布は祝福の際にカルマパが自ら首に掛けてくれるもの。(右)ダラムサラにあるチベット仏教のナムギャル寺。

ばばさき　けんじ　さん
タンカ（仏教画）絵師。1952年長崎県佐世保市生まれ。71年慶應義塾大学法学部政治学科に入学。大学4年生のときにインド、ネパールなどを回り、卒業後のインド行きを決意。また、このとき初めてタンカを知り、その緻密な芸術性に感動する。アルバイト期間を経て数年後、再びインドへ。ダラムサラでダライ・ラマ法王宮殿のチベット人タンカ絵師、チャンパ・ツェタン師と知り合い、タンカの制作技法を師事する。以来、20数年にわたりインド在住。現在もダラムサラにて日本人のタンカ絵師として活躍中。著書に『異境』（日貿出版社）。今年10月25～30日、横浜の港北東急デパート（☎045-944-6111）にてこれまでの主だった作品の展覧会が開催される。このほか、東京・お茶の水のギャラリー間瀬（☎03-3233-0204）では定期的に作品展が開催されている。下の写真は今年5月の作品展の模様。

れに苦痛を感じてしまった」

ちょうどゴアが暑さで過ごしにくくなってきた頃、高校時代の友人がダラムサラに滞在していることを知る。涼しくて過ごしやすい山岳地帯だという。

流されるように、しかしそれでいて導かれるように到達したダラムサラ。

数日後、彼はある人物を訪ねようとしていた。その人はタンカを描いているという。人間技とは思えないあのタンカを……。どうしても自分の目で確かめたくなった。

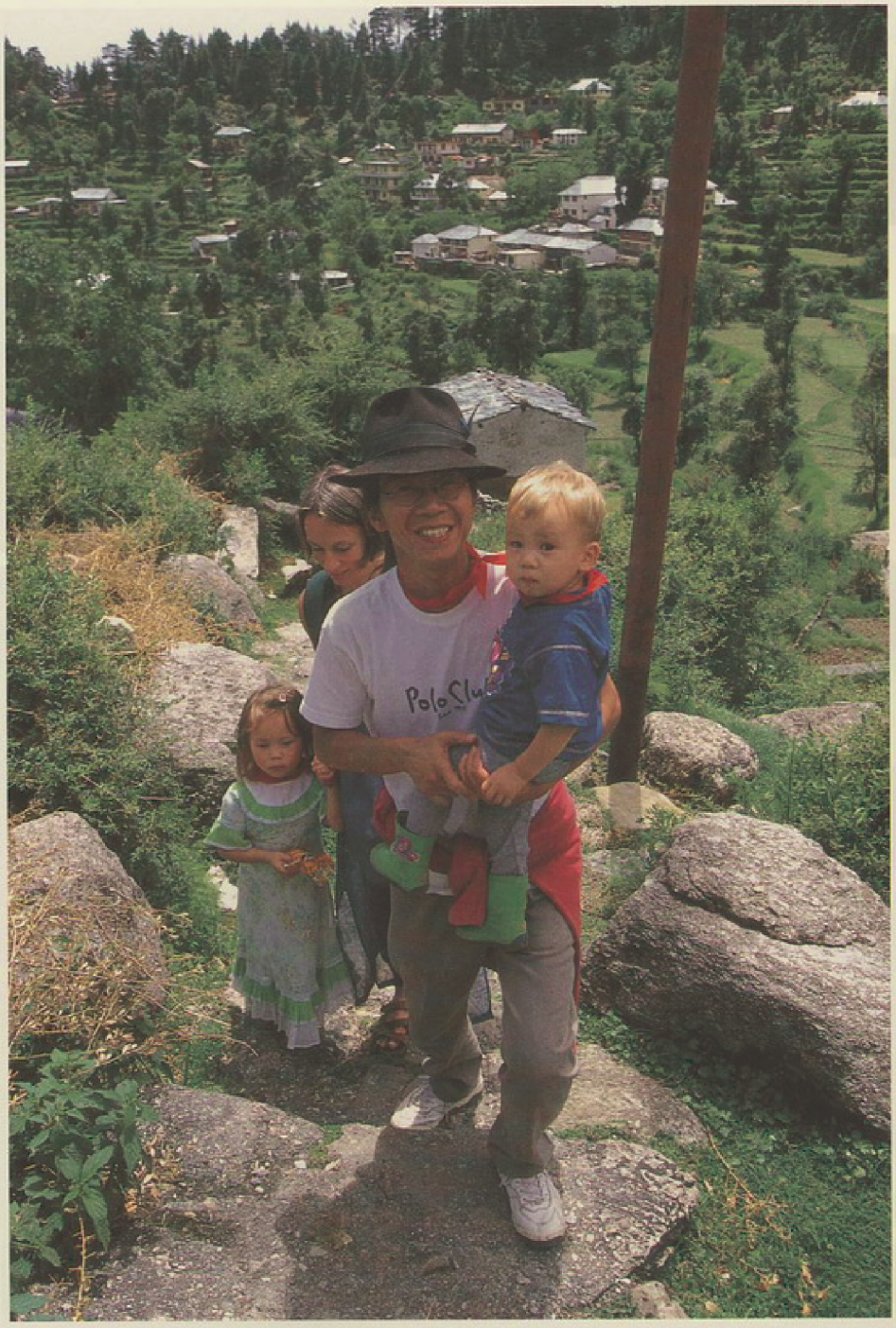
タンカ絵師チャンパ・ツェタンは、突然訪ねてきた旅人を笑顔で迎えてくれた。その笑顔は旅人を魅了し、タンカ絵師・馬場崎研二を生んだのだ。

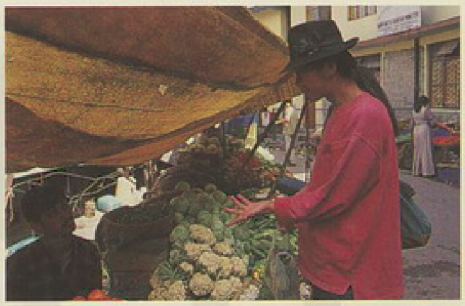
絵画との出合い、仏教との出合い

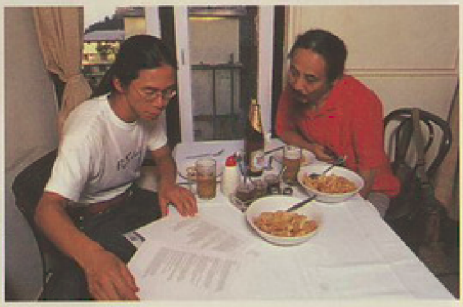
タンカには、芸術的な側面と仏教的な側面とがある。意外にも馬場崎さんは、どちらの分野でも専門の教育を受けたことがなかった。

仏教に初めて出合ったのはネパール。旅仲間に誘われて参加した外国人向けの瞑想教室で、日本にも立派な仏教があることを欧米人から教えられた。その後、日本の仏教を勉強。現在も座禅は日本式だ。

絵はといえば、子どもの頃スケッチが好きだった覚えはあるとい







(上)ダラムサラのバザールにて。(中央)長女の雅(みやび)ちゃんの通うチベット人幼稚園。抱いているのは長男の乃敦(のあ)君。(下)20年来の朋友、チベット人のタシ氏と。二人は失われゆくチベット文化を後世に残そうと、タンカなどを集めたチベット博物館の建設を計画中で、資金源を探している。

(上)近隣の山を家族でハイキング。道中、陽気なエヴァ夫人がみんなを笑わせていた。

う。兄姉といっしょに絵画教室に週に一回通っていたこともある。ただし、

「先生が嫌いだったし、教室というものが嫌いだった。これ描け、あれ描けと指示されると逆らいたくなった」

学生時代にメインストリームからあえて外れた馬場崎さんの「反骨精神」は、幼い頃すでに芽生えていたようだ。

そんな馬場崎さんが師チャンパ・ツェタンのもとには一一年間師事した。それは、ひとえに師の人柄によるところが大きかった。

授業と呼べるものは一日わずか一〇分程度。馬場崎さんが描いた線を無言で手直しするのみだった。無言だったのは、言葉が通じなかったせいもあったが、言葉は必要なかったのであろう。

それ以外の時間、馬場崎さんは師がタンカを描くのをひたすら眺めて過ごした。師はいつもタンカに向かって絵筆を動かし、「大きな笑顔」を浮かべていた。

馬場崎さんは今、師のタンカの伝統、そしてその笑顔を受け継いでいる。チベット人の多くが、外国人である「ババサキ」のタンカを文句なく一流と認める。

外国人が伝える、民族の伝統

タンカは経典の儀軌に忠実に従って描かれなければならないという大前提がある。馬場崎さんの描くタンカは、こうした伝統を忠実に受け継ぎつつも彼独自の味が加わっているという。

「日本人が描けば当然日本的な味が自然と加わる。そこに絵師の想像力、オリジナリティが発揮される。だからこそ人間が描く価値があるんだ」

例えば、タンカに現れる「波」

(右)ダラムサラから見えるヒマラヤの峰々。標高1800mに位置するダラムサラは風光明媚な土地で、欧米からの旅行者も数多く訪れる。

(下)自宅からダラムサラの町へ続く山道で、顔なじみのチベット人老女と立ち話。ここでも、チベット人特有の「包み込むような笑顔」が終始浮かんでいた。

の紋様に浮世絵風のタッチを取り入れたりもした。師チャンパ・ツェタンも、そんな弟子の試みを面白がる懐の深い人物だった。

「僕が外国人だからできることだと思う。外国人であるということは一つの特権かもね」

『異境』――馬場崎さんの近著である。「生まれ育った日本、時間と自然を与えてくれるインド、どちらも僕にとっては『異境』。その状態がベストじゃないかな」

タンカの伝統を受け継ぐ者は多くはない。若い世代のチベット人たちは、最低七年はかかるという下積み生活になじめず、次々とドロップアウトしてしまう。どこの文化にも起こっている、伝統主義と合理主義のぶつかり合いだ。

「文化は変化していくものだということは、よくわかっている。しかし、変わってはいけないものもあるのではないか……」

異国の民族文化を継承し、それを日本に伝えるというテーマを背負った絵師のまなざしは、双方の「異境」の未来に向けられている。まなざしは厳しくとも、常に笑顔をたたえて。 A

おさだ・ゆきやす　フリーライター。一九六五年愛知県生まれ。八七年以来、チベットにたびたび通い続け、夏の間は現地駐在ツアーガイドも務める。著書に『ぼくのチベット・レッスン』(社会評論社)、『旅行人ノートー チベット』(旅行人)、『あやしいチベット交遊記』(現代書館)がある。